横光利一

yokomitsu riichi

紋章

kōdansha
bungei bunko

紋章（もんしょう）
横光利一（よこみつりいち）
©Shozo Yokomitsu 1992
一九九二年七月一〇日第一刷発行
発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2・12・21 〒112-01
電話 編集部（03）5395・3513
販売部（03）5395・3626
製作部（03）5395・3615
デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社国宝社
定価はカバーに表示してあります
Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合せは文芸文庫出版部宛にお願いいたします。（庫文）
講談社
文芸文庫
ISBN4-06-196185-3

紋章

yokomitsu riichi
横光利一

講談社 文芸文庫

目次

紋章　五

解説　小島信夫　三五五

作家案内　神谷忠孝　三六六

著書目録　保昌正夫　三七九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

紋章

一

夜の大川端に沿って走る自動車の窓に雨が流れつづけてやまない。私は助手台に乗っている雁金とさきから話していたのもやめ、中潮に押し上げられる満満とした真黒な水面を眺めながら、今夜の雁金の計画はどこまで成功するものであろうかと、早や疑いが起ってきてならなかった。ときどき、突き進んでくるヘッドライトの明滅する中で、降り下る雨足の燦然と輝き連る光鋩が、ぐらりと急角度に一転する度に、私は夢想から飛び退いて眼を見張るのである。雁金はと見ると、彼は恐らく私が彼に幾度も今夜の杉生との対談について教えたように、段取りを幾回となく繰り返しているのに相違あるまい。ときどき彼は胸のチョッキが膨らみすぎてはいないかと胸に手をやったり、首筋を掻いてみたりしては

いるが、多分、正直者の早口な彼は、杉生と逢えば、いきなり話の前後を顚倒させて、あけすけにぼろを饒舌ってしまうであろう。もうそれは私には眼に見えていることであった。

目的の家に近づくにしたがって雁金は不動の姿勢をとり始めた。今夜雁金が失敗すれば、彼の好機は後一二年の間は先ず来ないと見なければならぬ。彼の横にいる運転手の戸山は雁金の目的を早や知っていると見えて、ときどき雁金の方に傾きかかってはにやにやと笑っていた。これは雁金がチョッキの下の腹部に、彼の精製中のバナナの皮を保温するため、今も巻きつづけているのにちがいない証拠である。私は雁金が私の横の広いクションへ坐らなかった原因が、この車が自身の監理を頼まれている自動車店の車であるからだというのではなく、腹部に巻きつけたバナナの皮の醱酵する臭気を私に近かよせないためだと、ようやく今ごろになって分って来た。

しかし、いよいよ芝の杉生家の玄関へ自動車が着いたとき、あれほど私が心配していたにもかかわらず全く意外な事件が持ち上ってしまった。それは丁度私が停っている自動車の中に坐って、出ていった雁金の再び戻って来るのを待とうとしているときである。私の乗っている自動車とは別に一台の自動車が玄関のヒマラヤ杉の横に停っていた。始めは私も雁金も幾分固唾を飲んでいたときとて、その自動車には気附かずにいたが、雁金が雨の中を小走りに玄関まで行きつくと、突然、光りを背にした一人の若い美しい婦人が玄関か

ら送られて出て来て、よく延びた大跨な足で裾除けを蹴りながら停っていた自動車に乗り込んだ。すると、雁金はその婦人が彼の横を顔も見ずに行き過ぎてしまったころ、不意に何事かに気がついたと見えて、くるりとこちらを向き返ると、また車の方へ馳け戻って来た。私は忘れ物があったのだと思ってぼんやりと彼を眺めていたが、彼は私の車に戻らずにこの婦人の後を追っかけていった。しかし、雁金がその婦人に追いついたときには、もう婦人が自動車に乗ってしまってばたりとドアを閉めたときだったので、間もなく大きくカーブを描いて自動車が鳴り出すと、雁金は引き摺られるように踏台に足をかけたまま、窓を激しく叩きつづけて開けろ開けろと叫んでいた。自動車は雁金を振り落すように濡れたヒマラヤ杉の中へぐさりと刺し込んで、急に強く走り出した。しかし、雁金は窓にしがみついたままたちまち自動車と一緒に見えなくなった。しばらくの間唖然としていた私は、すぐ私の自動車に命じて彼の後から追わしていった。けれども、私の出足は前の自動車とはもうよほど遅れて走っていた。私たちが門を出たときには、もう彼の乗っている自動車は大通りを左へ曲ろうとしているときであったから、私たちがそこまで出かけたときは、他の方から疾走して来る眼まぐるしく濡れた幾台ものぐるぐるした自動車に邪魔されて、どれがどれだか明瞭に区別することが出来なかった。そのうえに、雲霧のように降りかかっている秋雨の煙りが、ぱっとライトに輝き渡る度毎に、前後は朦朧として一層見えなくなって来るのである。それでも私の運転手は雁金の配下であるだけに、スピードを増

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

して見る見るうちに数台を追い抜いた。私は運転手に雁金のいる自動車の番号を覚えているかと訊ねてみた。運転手もうろたえていたときと見えて、細いところは見えなかったと云って海底のような暗い大道を無茶苦茶に走りつづけた。しかし、うっかりするともう雁金は抛り落されてしまっていて、私たちより後になって今ごろはまた杉生家の玄関の方へ戻っているころかもしれないと、だんだん私は懸念に堪えなくなって来た。

「君、どれだったか分っているかね。」

「分りませんね。それに車がこう辷っちゃ、こりゃ駄目ですぜ。危い危い。」と運転手の戸山が答えた。

「それじゃ、もう後へ引き返して貰おうか。」と私は云った。

それにしても、私は雁金のこの突然な挙動には発狂したのではなかろうかと思う以外に、さっぱり理由が分らなかった。私は戸山がもしかしたなら知っているのではあるまいかと思ったので、それとなく彼に訊ねてみたが、彼も私同様に皆目何のことだか分らないと答えた。しかし、雁金の追っかけた若い婦人は人違いでなければ、杉生家とは何らかのかかわりはあるにちがいないことだけは確実であった。運転手の戸山の話では、杉生家へ来たのは今までに度度あったから、あの婦人は杉生家の令嬢でないことだけは明瞭だと教えた。私は雁金の前に話した杉生家のことを思い出した。杉生家は雁金の今いる自動車店とは親戚関係になっていて、自動車店主の押坂は雁金と故郷を同じくしているところか

ら、落魄している雁金を救う目的で自動車とは全く縁遠い彼に、当座の間店の管理を頼んだのである。

私はついでに少し前へ戻って雁金がこの夜杉生家へ私を同道して来た目的を話すことにしよう。実はこれは彼が私を連れて来たのではなく、私が彼を連れて来たのであるが、それまでにはなかなかややこしい複雑な話をしなければならない。

雁金の私に話したところによると、彼の家は東京近郊の県下にあっては、その郡第一の資産家であり、代代勤王をもって知られている名門であったとのことであるが、雁金の父のころから家産は次第に傾きかかり、雁金の青年期には、彼が押坂家の司る商事会社の支配人の名目に置かれて他家の仕事に従事しなければならなくなった。しかし、その土地では今なお資産よりも名門を尊ぶ風習があったから、彼が郷里にいる間は生活に不自由することは何もなかった。ただ雁金の野望は一重(ひとえ)に家産の挽回にかかっていた。それより以前に雁金は一時産業組合の購買係りをしていたことがあったが、彼が押坂商事会社の支配人をやめた原因というのも、つまりはそのとき貯えた彼の物価に対する研究心のいたすところといっても良いであろう。彼の不幸と狂気に近い研究心とは、そのときから雁金を引き摺り廻してやめなかったのである。

欧洲の大戦が終ると間もなくわが国の物価は未曾有(みぞう)の奔騰を来たしたことは、今は誰でも知っていることであろうと思う。このころには、それらの物価の奔騰するさまは夢のよ

うなものであったから、世の人人は一攫千金の夢につかれ、誰も彼もきょときょとして何事をしてよいものか全く仕事に手のつかない時代であったが、購買係りをしていた青年雁金の満満たる野望も、ひとしくこのとき爪を現してかかるべき襞にひっかからざるを得なかった。ある日、彼が新聞を見ていると、九升入の樽一本の醤油の値段が、十二円に改定されたと発表されたことがあった。そのころは最上の醤油が一樽三円であったときとて、この急激な四倍の躍進の仕方は、物価とその原料との間に大きく開かれた隙間に、突如として雁金をほり落してしまったのである。雁金はしばらくの間は、どちらを向いて良いのか見当さえつかなかった。ただ彼はよじ登ってひと儲けすべき好機の到来していることだけは感じることが出来たが、時勢の特種性を見極めるためには、あまりに彼は若すぎて無我夢中でありすぎた。そこで、彼は飛び上った醤油の価格ばかりに爪を矢鱈と鋭く研ぎすましたままうろついているときに、これも全く偶然なことには、丁度そのころを見はからってのためであろう、ある新聞の広告面に特許芋取醤油会社の、プレミアム附きの株式募集を見つけたのである。雁金の野望は直ちに再び、その好機に飛びついて足をぶらぶらさせ始めた。

その広告面には、従来の醤油は小麦と大豆で造るがゆえ、値段をはってもひき合わないが、本社の特許は薩摩芋を原料としているため、生産費はいままでの三分の一もかからない。たとえば一般製品の半額にて販売するとしたって、なおかつ五割の利益がある。しか

もこの方法は本社独占の専売特許法によるものである。――

容易にぬけ上ることの出来ない不幸というものを造るためには、自然は多くの場合、そのものの上に幾重かの計るべからざる偶然を選びよせて来るものであるが、雁金もまたこの例にもれず、このとき三度目の偶然が彼に向って襲って来た。それは、彼の近所に一代で百万の産をなした成功者の一人に、芋から焼酎を取ったもののあったことだった。なおそのうえに、薩摩芋は雁金の郷里では多産であり、しかも小麦や大豆の一俵十円もすることからくらべれば、薩摩芋はわずかに七十銭であった。雁金の躍り上った熱情は想像するにかたくはない。彼はただちに芋取醤油の株式を決意して、その計画を押坂の親戚にあたる杉生家に持ち込んだ。杉生家と雁金との関係はこのときからはじまったのである。

杉生兵衛は資産百万を越えるといわれる富豪であるだけに、雁金八郎の計画にはすぐ賛意を表した。彼は雁金よりもさきから薩摩芋から醤油をとってみたいとかねがね思っていたことであったので、「これは神の引き合せだ。」とそのとき云って、お負けに株の方は万事自分が引き受けるから特許権だけを一時も早く雁金に買収する工夫をしてきてくれるようと頼んだ。特許の方のことは杉生家へ行くまえに、雁金がも早や方法をめぐらせて来たのであったから、そのときすぐ兵衛に向って、自分は芋取醤油の発明者と昵懇(じっこん)にしている銀行の支配人の弟という人を知っているが、これは自分の小学校の校長であるから、もうその人に相談して来てあるので、紹介状をいつなりとも貰いえられる段取りまで出来

ているということを話すと、杉生は「それはそれは。」と云って、「私の倅も遊んでいるから丁度良い。一緒にあなたとやりましょうから、あなたも一つ出かけていって向うの様子を調査して来てもらいたい。」と云うことになり、雁金は杉生の子の薫と遠い山陰地方まで出かけていくことになった。

二人はそこで時をうつさず山陰の湖のほとりにある風雅な町へ行くと、早速銀行の支配人に逢い、その紹介でいよいよ発明家の山崎俊介に逢った。山崎俊介は容貌魁偉な人物で、発明家には似ず弁舌に爽かなところへもって来て、遠来の客というので、その土地一流の旗亭へ二人を案内した。率直無類の雁金と世間を知らぬ良家の長男とは、このへだてのない鄭重な饗応のために、難なく余裕ある思慮分別をかき消してしまったのである。殊に二人は事を一刻も早く決したくてならなかった。この感情は遠方から来た事業家にとっては、何事よりも禁物の疲労から襲ってくるところの悪癖であるにも拘らず、二人は根柢より先ずその疲労に足をさらわれてしまっている自分の身の上には、容易に気附くことが出来なかった。なお且つそのうえ、老獪な山崎俊介は、特許権の売りつけに対してはすぐ賛意を表さず、二人の若者の心に先ず自身への信頼を植えつけんがため、自分の特許の欠点に念を重ねて説明し始めた。そうして後、徐徐に発明家がいかに馬鹿な目に逢わされている正直者であるかという事を長長と語って云ったのである。

「私の醤油は最初の発明でありまして、権利金三万円で今の会社に譲り渡したのであります

すが、実に商人というものは脱け目がございませんね。上手いもんです。新帰朝者のフランス農学博士で豊永鉄之助という人を顧問ということにいたしまして、例の貴族院議員の互選運動というやつにまんまと成功いたしますと、否応なしにその農学博士に一肌ぬがせまして、日本国中を各府県別にして特許実施権というやつを新しく付与させてしまいましたが、その収入があなた、それだけで百万円に近くなっているのですからね。実際に私が譲った権利のおよそ三十倍になったわけでございますよ。」

上には上があるという言葉は全くこの場合には興味が多いと思う。いったいにからくりと云われる人智の窮極を目ざして廻転していく陥穽は、裏へ裏へと深刻に廻転して行く度びに、ついにはもとの表面へいつの間にか舞い戻っているという具合のものほどに深い自然さを感じるが、このときにも、山崎俊介の計画は、はなはだ自然に巧妙に期せずして行われていったとも思わるべきところもあるにはある。しかし、彼の計画の中には、第一の彼の発明よりも、第二の彼の発明の新たな権利を二人に売りつけんとする欲望が、最後に隠されていたのであった。彼は第一の発明の芋取醤油のことについては、あくまでも二人に断念させんがために云った。

「芋取醤油というものは、実は芋ばかりでは出来ません。あれは大半は芋ですけれども、やはり普通の醤油のように大豆や小麦も少しは入れて使うのでして、良質の醤油を造ろうと思えば、どうしたって豆が必要でありますから、広告のようには在来の半値で出来ると

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton